

群衆と19世紀イギリス小説*

伊 藤 正 範

要 旨

産業革命を経て19世紀に入ると、ロンドンや地方工業都市を舞台とした小説において、群衆が主要な役割を果たすようになる。本論文では、グスタフ・ル・ボンの群衆理論を一つの参照点としながら、ディケンズ『オリバー・トゥイスト』（1839）、『バーナビー・ラッジ』（1841）、ギヤスケル『北と南』（1855）、ハーディー『日陰者ジュード』（1895）における群衆表象の変遷を読み解いていく。その際、当時の労働運動やジャーナリズムの発展に際して群衆がどのような変化を遂げていったのか、またそうした変化がフィクションの形成にどのような影響を及ぼしていったのかという点に注目する。

キーワード：群衆 (crowds)、19世紀イギリス小説 (19th-century British novels)、小説の語り (fictional narrative)、労働運動 (labour movements)、ニュー・ジャーナリズム (New Journalism)

I 序

イギリス文学と群衆との関係は取り立てて新しいわけではない。例えば、シェイクスピア『ジュリアス・シーザー』（William Shakespeare, *Julius Caesar*, c. 1599）において、殺されたシーザーの亡骸を傍らにしたアントニーは、直前に行われたブルータスの演説を凌駕する雄弁術をもって大群衆を味

* 本研究はJSPS 科研費 JP26370304の助成を受けたものである。

方に付け、結果的に勝利を手中にする。あるいは、サムユエル・ピープス (Samuel Pepys) の日記では、1668年にロンドンで発生した、徒弟たちによる暴動への言及がなされている¹⁾。

しかし、フィクションにおける群衆の本格的な登場は、19世紀の到来を待たなければならない。産業革命を経て、都市に多くの労働者が集中するようになったヴィクトリア朝時代、小説は自らの舞台としてロンドンや地方工業都市を選び、そこにおいて形成される群衆へと関心を向け始めるのである。本論文では、ディケンズ、ギャスケル、ハーディーの小説を題材とし、これまでほとんど通史的な形で検証されてこなかった19世紀イギリス小説と群衆との関係に注目する。

II ディケンズ『オリバー・トゥイスト』における正義の群衆

チャールズ・ディケンズ『オリバー・トゥイスト』(Charles Dickens, *Oliver Twist*, 1839) の終盤、それまで主人公オリバーの運命をかき乱してきた二人の悪役、サイクス (Sikes) とフェイギン (Fagin) は、ある共通する存在に取り囲まれながら、悲惨な末路を迎える。それはロンドンの無数の群衆である。

情婦のナンシー (Nancy) を殺害し逃亡したサイクスは、彼女の亡霊と追っ手の影に脅えながらついにロンドンに舞い戻り、仲間たちの隠れ家へと逃げ込んでくる。しかし、悪事は必ず露見するというのが小説の黄金律であるならば、彼もまたそこから逃れることはできない。サイクスの犯罪を糾弾する仲間の少年と争ううちに、「怒り狂った群衆の叫び声」(“the cry of the infuriated throng”) は次第に隠れ家へと迫ってくる。そして命からがら屋根に逃れた彼を、人々の無数の顔は容赦なく取り囲む。

The crowd had been hushed during these few moments, watching his motions and doubtful of his purpose, but the instant they perceived it and knew

1) Pepys 129-32 参照。

it was defeated, they raised a cry of triumphant execration to which all their previous shouting had been whispers. Again and again it rose. Those who were at too great a distance to know its meaning, took up the sound; it echoed and re-echoed; it seemed as though the whole city had poured its population out to curse him.

On pressed the people from the front—on, on, on, in a *strong struggling current of angry faces*, with here and there a glaring torch to light them up, and show them out in all their wrath and passion. The houses on the opposite side of the ditch had been entered by the mob; sashes were thrown up, or torn bodily out; there were *tiers and tiers of faces* in every window; and cluster upon cluster of people clinging to every house-top. (338-39; emphasis added)

もはやサイクスに退路がないのを見て取った群衆は勝ち鬨を上げ、その反響はさらなる反響を呼び起こしていく。まるで「街全体が彼を罵るためにその住人を注ぎ込んだかのような」光景を前に、サイクスは屋根からロープで飛び降りようと試み、誤って自らの首を括って絶命する。

もう一人の罪人フェイギンも、同様に群衆に囲まれながらその凄絶な最期へと歩みを進めていく。スラム街を本拠地に暗躍してきたこの少年スリ団の元締めもまた、正義の手を免れることはできない。ついに捕らえられた彼が引き出されるのは、四方を無数の顔と目で隙間なく埋め尽くされた法廷である。

The court was paved, from floor to roof, with *human faces*. Inquisitive and *eager eyes* peered from every inch of space. From the rail before the dock, away into the sharpest angle of the smallest corner in the galleries, all looks were fixed upon one man—the Jew. Before him and behind: above, below, on the right and on the left: he seemed to stand surrounded by a firmament, all bright with *gleaming eyes*. (350; emphasis added)

フェイギンの犯罪が白日のもとに暴き出されたまさにその瞬間、場面を覆い

見くすのは、まるで殺人者サイクスに正義の裁きを——間接的にしろ——もたらした群衆を思い起こさせるような、大勢の人の群れである。この群衆は、やがて下された有罪の判決に歓喜し、その叫びは反響に反響を呼び、法廷は「怒りの雷鳴」(“angry thunder,” 351) で包まれていく。処刑の朝、フェイギンを待つ絞首台の周りを取り囲むのは、やはり「膨大な人の群れ」(“[a] great multitude,” 356) である。

この二人の死の場面に共通するのは、群衆が間接的な正義執行者としての役割を帯びて登場するという点だけではない。サイクスを取り囲む群衆は「怒った顔の流れ」、あるいは「何層にも重なった顔」として、またフェイギンの裁きを見守る群衆は、法廷に敷き詰められた「人間の顔」、「怒った目」、あるいは「きらめく目」として表される。実は、これらの換^{メトニミー}喩は先行する場面と潜在的な結びつきを有している。隠れ家の自室のドアを閉め、フェイギンが床の隠し場所から取り出すのは、盗品の時計や宝飾品が収められた小さな箱である。ほくそ笑みながら一つずつ中身を眺める彼がふと気づくと、そこには少年オリバーの視線が注がれている。

As the Jew uttered these words, his bright dark eyes, which had been staring vacantly before him, fell on Oliver's face; *the boy's eyes* were fixed on his in mute curiosity; and, although the recognition was only for an instant—for the briefest space of time that can possibly be conceived—it was enough to show the old man that he had been observed. He *closed the lid of the box* with a loud crash; and laying his hand on a bread knife which was on the table, started furiously up. (67; emphasis added)

仲間の目をはばかりながら戦利品の鑑賞を独り楽しんでいたフェイギンは、「見られていた」という事実^{シネクドキー}に気づくと慌てて小箱の蓋を閉め、怒りわななきながらオリバーに向かってナイフを振りかざす。法廷や処刑台で彼を取り囲む群衆の「目」が、換喩として犯罪の露見を表しているのであれば、この小箱はそれと対をなしながら、彼の犯罪行為の隠蔽を表す換喩——より正確には提^{シネクドキー}喩——として機能している。犯罪とは常に蓋の下に、すなわち視線

が遮断された暗部に蔓延る害悪なのである。

類似した比喩は、サイクスによるナンシー殺しの場面でも再登場する。惨殺された死体が横たわる部屋には、サイクスが望むと望まざるとにかかわらず、日の光が差し込んでくる。

The sun,—the bright sun, that brings back, not light alone, but new life, and hope, and freshness to man—burst upon the *crowded city* in clear and radiant glory. Through costly-coloured glass and paper-mended window, through cathedral dome and rotten crevice, it shed its equal ray. It lighted up the room where the murdered woman lay. It did. He tried to shut it out, but it would stream in. If the sight had been a ghastly one in the dull morning, what was it, now, in all that brilliant light! (317; emphasis added)

「人の群れる街」に遍く降り注ぐというこの日の光が、換喩として、この先サイクスの犯罪行為に向けられていく世間の関心を表しているのは明らかだろう。返り血で染まった服を始末した彼は、愛犬が「足を再び汚して犯罪の新しい証拠を街路に持ち出さないよう」(“lest he should soil his feet anew and carry out new evidences of the crime into the streets,” 317) 細心の注意を払いつつ、ドアに鍵をかけて外に出る。ここでの「日の光」と「ドア」を「目」と「宝箱の蓋」に置き換えてみれば、フェイギンの際と同様の関係が成立していることが容易に見て取れよう。このように換喩によって導かれる犯罪と群衆のせめぎ合いは、物語の終幕において「蓋」あるいは「ドア」が取り去られ、外部からの視線がなだれ込んでくることによって解消される。ここでの群衆とは、隠れ潜む犯罪に絶えず視線を注ぎ続ける、いわば不正の監視機構として機能しているのである。

Ⅲ ディケンズ『バーナビー・ラッジ』とル・ボンの群衆理論

『オリバー・トゥイスト』における群衆のエネルギーと決定力は、物語に散りばめられたさまざまな混乱を強制的に収束へと向かわせるほどの力強さを内包している。こうした群衆の力は、2年後に出版された『バーナビー・

ラッジ』(*Barnaby Rudge*, 1841)においても中心的な役割を果たすことになる。ただし、この小説においては方向性がだいぶ異なる。というのも、群衆は、正義の執行者としてではなく、社会を混乱に陥れる無秩序として登場するからである。1780年に実際に起こったゴードン暴動を下敷きにしたこの小説において、群衆はロンドンを襲う災厄と化す。

ゴードン卿の主導する反カトリック運動が昂じて膨れあがった群衆は、やがてロンドン中を席卷し、監獄、銀行、政府機関、そして法曹や行政関係者の私邸へと次々に襲いかかっていく。殺戮や放火を繰り返す暴徒たちの襲来により市民たちは脅え、ロンドン市長までもが自らの身の安全のために傍観を決め込む始末である。略奪した酒の中で溺死したり、自ら火中に飛び込み焼け死んでいったりする暴徒たちを支配するのは、もはや狂気以外の何ものでもない。「巨大な群衆は一切の理性も思考も持たず、向こう見ずな感情によって突き動かされていた」(“[t]he great mass never reasoned or thought at all, but were stimulated by their own headlong passions,” 421)と描写されるように、暴徒たちは、平時において個々の人間が持つはずの理性や判断力を失い、全体を覆う興奮状態と同調しながら、ただ短絡的な感情のみによって行動するのである。

こうした群衆の特徴は、当時一世を風靡した群衆心理学者、グスタフ・ル・ボン (Gustave Le Bon, 1841-1931) の理論に合致を見ることができると言える。その著書『群衆心理』(*Psychologie des Foules*, 1895)において、ル・ボンは「群衆の時代」(“ERA OF CROWDS,” x)の到来を告げながら、もはや無力なものとなりさがった法や制度ではなく、科学的手法に基づいて群衆の心理を的確に分析・把握し、その圧倒的な力と脅威に対抗する必要性を説いた²⁾。ル・ボンによると、群衆の一部となった人間は、「一人でいるときには必然的に抑制下に置いている本能に身を委ねる」(“yield to instincts which, had he been alone, he would perforce have kept under restraint,” 6)という。また、

2) 以降の引用は、英訳版 *The Crowd: A Study of the Popular Mind* (1896) に基づく。

群衆状態においては、「あらゆる感情や行動は感染性を持つ」(“every sentiment and act is contagious,” 7) といい、さらには「暗示」(“suggestions”) によって「意識的な個性」(“conscious personality”) が奪い去られ、催眠状態に導かれた個人は、「脊髄の無意識的活動の奴隷」(“the slave of all the unconscious activities of his spinal cord,” 7) になり下がるというのだ。

また、ル・ボンは、群衆が「自らを本能的に主導者の権威のもとに置く」(“place themselves instinctively under the authority of a chief,” 72) ため、誰がリーダーとなるかによって、その考えや行動が変転するものであると主張する。そして多くの場合、そのリーダーとは「単なる首謀者か扇動者以外の何ものでもない」(“nothing more than a ringleader or agitator,” 72) のだという。実際、『バーナビー・ラッジ』の暴動において暴徒たちを扇動する役目を担うのは、荒くれ者でレイブ魔のヒュー (Hugh) や、絞首刑執行人のデニス (Dennis)、そして怠け者の徒弟タパーティット (Tappertit) といったごろつきや悪漢たちである。こうした群衆像こそが『バーナビー・ラッジ』を通してディケンズが提示するものであり、あらゆる制御を外れたその力は、『オリバー・トゥイスト』の終幕において正義の裁きをもたらす群衆とは——同じエネルギーと自律性を有しながらも——異なり、体制を転覆させる危険な因子として現れる。まさにこの点において、ディケンズの小説には、ル・ボンの群衆理論の根幹を形成するのと同じ危機意識が、それを半世紀以上も先取りする形で、的確に示されているのである。

IV エリザベス・ギヤスケル『北と南』における労働運動と群衆

もっとも『バーナビー・ラッジ』に登場するこうした暴徒たちは、前世紀の反カトリック暴動におけるものであるという一点において、ヴィクトリア朝社会という絵画にぴったりとはまり込むものではないかもしれない。他方で、エリザベス・ギヤスケルの『北と南』(Elizabeth Gaskell, *North and South*, 1855) は、ディケンズと同様の危機意識を共有しながらも、その目を、同時代のまさに特徴的と言ってよい集合体へと向ける。

物語の中盤、「北」の町ミルトンでは、不況下で生活苦を強いられてきた工場労働者たちの不満が、ストライキという形で爆発する。デモ隊が大挙して押し寄せてきた工場主ジョン・ソントン（John Thornton）の屋敷には、折悪く主人公マーガレット（Margaret）が、病に伏す母のための使いでやって来たところだ。労働者たちの群れが、「低く太い怒りの声からなる獐猛なうなり声」（“the fierce growl of low deep angry voices,” 176）を上げながら、スト破りのアイルランド人たちがいる工場へと向かいかけたとき、気の強いマーガレットは激情に身を震わせながら、「もしあなたが臆病者でないならば今すぐ下に降りていき」（“go down this instant, if you are not a coward,” 177）、アイルランド人たちを助けるべく、「男らしく彼らに立ち向かう」（“face them like a man,” 177）ようにとソントンを促す。マーガレットが自らの過ちに気づいたときには時すでに遅く、彼女に焚きつけられた義勇心をもって戸口に立ちはだかるソントンには、すでに大勢の労働者たちの怒りの目が向けられている。

He was on the steps below; she saw that by the direction of *a thousand angry eyes*; but she could neither see nor hear anything save the savage satisfaction of the rolling angry murmur. She threw the window wide open. Many in the crowd were mere boys; *cruel and thoughtless*,—cruel because they were thoughtless; some were men, gaunt as wolves, and *mad for prey*. (177; emphasis added)

まるで集団催眠状態に陥ったかのような労働者の集団は、動物的な——ソントンの言葉を借りれば「野獣」（“wild beasts,” 177）のような——本能の赴くまま、「残酷で無思慮」に獲物を渴望する。アイルランド人たちを送り返すようにという彼らの要請をソントンがきっぱりと拒絶すると、怒りが頂点に達した群衆は、今にも彼に襲いかからんばかりとなる。しかしその瞬間、両者の間に飛び込んで来るのはマーガレットである。それまでのソントンへの反感や軽蔑とは裏腹に、「両腕で彼を抱きしめた」（“threw her arms around him,” 179）彼女は、「自らの体を盾にして」（“made her body into a

shield,” 179)、群衆の暴力から彼を守ろうとする。しかし向こう見ずな怒りに身を任せた群衆の勢いはもはや止まらない。

Their reckless passion had carried them too far to stop—at least had carried some of them too far; for it is always the savage lads, with their love of cruel excitement, who head the riot—reckless to what bloodshed it may lead. A clog whizzed through the air. Margaret’s fascinated eyes watched its progress; it missed its aim, and she turned sick with affright, but changed not her position, only hid her face on Mr. Thornton’s arm. Then she turned and spoke again:

“For God’s sake! do not damage your cause by this violence. You do not know what you are doing.” She strove to make her words distinct.

A sharp pebble flew by her, grazing forehead and cheek, and drawing a blinding sheet of light before her eyes. She lay like one dead on Mr. Thornton’s shoulder. (179)

ソーントンを狙った木靴が空を切ると、それを諫めるマーガレットの声も虚しく、続いて飛来した小石は彼女の額と頬をかすめていく。可視化された暴力が女性を——偶然ではあるにしろ——攻撃対象として発露する描写を通して、ギヤスケルが群衆を、ヴィクトリア朝的なジェンダー規範を侵犯する「悪」として提示していることは明白であろう。

そもそもこうしたフィクショナルな暴動の背景には、当時の現実世界における労働運動の進展が潜んでいる。『北と南』におけるストライキのモデルとされているのは、イングランド北部、ランカシャー州プレストンで1853年から54年にかけて起こった労働運動である³⁾。チャーティスト運動の支援を受けた織工たちが賃上げを求めて起こしたストライキは、労働者による議会の設立を目指すほどの野心的な運動に発展しながら、完全な敗北に終わる (Morton and Tate 103)。そもそも当時の労働運動において、成功の二文字

3) Shuttleworth xvii 参照。

はかなり縁遠いものだった。チャーティスト運動が盛んになった1837年以降、イギリスでは多くの集団的抗議活動が起こったが、そのほとんどが失敗か、大きな成果を上げることなく終わっている。一例として挙げられるのは、1842年に起こった、「プラグ暴動」(“Plug Riots”)と呼ばれる一連のストライキである⁴⁾。長引く不況の下、同年の6月から7月にかけて、イングランド中部のスタフォードやウォリックで炭坑夫や鉄工員が起こした抗議運動は、やがて北部のランカシャーやマンチェスターへと飛び火していく。紡績業などの他業種を巻き込みながら運動の規模が拡大していく中、労働者側の問題点は、リーダーシップ、組織、資金のいずれをも欠いていることにあった。次第に統率の取れなくなった労働者たちは暴徒化し、8月から9月頃になると、各所で——前述のプレストンも含め——騒乱が勃発するようになる。結果的に1,500人の逮捕者を出し、主導者が海外逃亡を余儀なくされたこの運動は、チャーティスト運動そのものの敗北と言ってよいものだった (Morton and Tate 92-94)。

『北と南』においてマーガレットに襲いかかる暴徒たちには、こうした1830年代後半から40年代前半にかけての不毛な労働運動の状況が反映されていると見てよいだろう。確かにギヤスケルの細やかな筆づかいは、当時の労働者の窮状を精緻にかつ共感的に捉えようとしている点において、ディケンズ以上のリアリズムを備えていると言ってよい。だが、その一方で、彼女の提示する集団としての労働者は、『バーナビー・ラッジ』における暴徒たちと同様、さらに言うならば、ボンンの理論において提示される群衆と同様、怒りと暴力に捕らわれた無秩序として現れる。ディケンズからギヤスケルに受け継がれた恐るべき群衆の物語は、こうして労働運動という新しい枠組の中に据えられていくのである。

とはいえ、『バーナビー・ラッジ』の群衆も『北と南』の群衆も、最終的に体制によって鎮圧されるという点において、あくまでも社会における一時

4) 操業を強制的に停止させるためにボイラーの「プラグ」を抜いたことから、この名称がつけられたと言われる (Morton and Tate 92)。

的な変則的^{アノマリ}事項として提示されているにすぎない。さらに言う、両者の群衆には〈悪〉から〈善〉への転換が用意されているという点でも類似が見られる。『バーナビー・ラッジ』の終末部、引き裂かれていた恋人同士が結び合わされ、まさに大団円を迎えようとする舞台には再び群衆が登場する。次第に近づいてくる彼らの叫び声と喝采は、やがて耳をつんざくほどの轟きとなってその場を埋め尽くしていく。悪夢の再来を思わせるような「密集した人々の群がり」(“a dense mob of persons,” 634)は、しかし、街の破壊者として現れたのではない。その歓声を取り囲むのは、騙されて暴動に加わったバーナビーと、彼を恩赦で救い出した鍵屋のヴァーデンである。暴徒たちが消え去ったロンドンでは、群衆もまた〈日常〉の姿へと——すなわち『オリバー・トゥイスト』でフェイギンを取り囲む群衆が体现するような正義の監視者としての姿へと——回帰し、秩序の回復を歓喜と祝福をもって迎え入れるのである。

『北と南』の群衆についても同様のことが言える。飛来した小石に傷ついたマーガレットの額から「濃い赤色の血の筋」(“the thread of dark-red blood”)が流れ出るのを見ると、群衆は突如として「激情に陶醉した状態」(“their trance of passion”)から目を覚まし、「恥じ入り」(“ashamed”)ながら退却していく(179)。そもそも、ギヤスケルの提示する暴動において、さまざまな社会的ヒエラルキーは転倒した状態に置かれている。工場主と労働者の関係はもちろんのこと、身を盾にしてソーントンを守ろうとするマーガレットの姿そのものもまた、ヴィクトリア朝的なジェンダー規範とは乖離したものである。しかし、マーガレットの血を見るやいなや、群衆——当然ながらその構成主体は男性労働者である——は、女性を傷つけるという非紳士的行為を犯したことを自覚し、我に返ったかのように引き上げていく。同時に、彼らの「卑怯な怒り」(“cowardly wrath,” 179)が女性に向けられたことを激しく窘めるソーントンの姿は、一時的な転倒状態にあったジェンダーヒエラルキーを即座に回復へと導く。このように性の〈正常化〉を通して、ギヤスケルの語りは、暴徒たちの反社会的エネルギーを回収していくのである。

『バーナビー・ラッジ』と『北と南』という二つの小説において共通するのは、ひとたび暴走した群衆の力が、作者の語りの管理下において、再び秩序の枠内へと収められていく点である。こうした群衆表象は、しかし、さらに時代を下って19世紀末、ハーディーの語りにおいて特徴的な変化を遂げることになる。

V ハーディー『日陰者ジュード』におけるモダン時代の群衆

トマス・ハーディーの『日陰者ジュード』(Thomas Hardy, *Jude the Obscure*, 1895)には、ディケンズやギヤスケルの小説のような暴徒は登場しない。そもそも、「狂乱の群衆を遙か離れた」(“Far from the Madding Crowd”)田園地方の生活を中心的に扱うハーディーの小説において、都市の群衆が登場するイメージはあまりないかもしれない。しかし、小説家としての最後の作品となったこの物語において、ハーディーは、大学都市オックスフォードをモデルとしたクライストミンスター(Christminster)を舞台に、その大勢の住人の姿を描き出す。

大学での学問を志しながら、貧困や階級の壁に阻まれ、石工となることを選んだジュードは、物語の終盤、スー(Sue)と二人の間に生まれた子供たちを連れて、かつての夢の地であったクライストミンスターへと舞い戻ってくる。ちょうど創立記念日を迎えた初夏の町は、カレッジから新しく輩出された博士たちの行列を控え、「待ち受ける人々の群れ」(“a crowd of expectant people,” 314)でごった返している。洩るスーを説き伏せてその中に立つジュードであったが、なかなかイベントは始まらない。ここである出来事をきっかけに、ジュードが「暇をもてあました群衆」(“[t]he idle crowd”)の関心を集めることになる。待ちくたびれた観衆の一人が、カレッジの建物に刻まれたラテン語の意味を問う声を上げたとき、彼がかつて独学で学んだ知識を披露したのだ。人々の目がジュードに向けられる中、これまでの苦渋の人生について彼が語って聞かせると、ほどなくしてジュードは自らが「好奇の中心」(“the centre of curiosity,” 315)に立っていることに気づく。しかしその関

心は長くは続かない。間もなくして、華やかなガウンに身を包んだ博士たちが登場すると、群衆の目は一斉にジュードから離れ、汚い身なりをした彼ら一家は、「その場にそぐわない滑稽な人々」(“ludicrous persons who had no business there,” 318)としてひっそりとその場を去るのである。

ここで、ジュードの人生談に耳を傾ける群衆は、ディケンズやギヤスケルの群衆のように凶暴な怒りを宿しているわけでもなく、あまつさえ何らかの特定の意志を内包しているわけでもない。祝祭日に群れ集った人々は、その場その場でたまたま眼前に現れたものに関心を向け、そしてその関心はまた次なる対象へと気まぐれに移り変わっていく。このように一貫性を欠いた群衆の行動は、ル・ボンの定義する「暴徒」のそれとも異なるもののように見える。

実は、こうした群衆の出現は、ル・ボン自身によっても認知されていた。実際、同時代の多くの群衆心理学者とは異なり、ル・ボンは「群衆」を物理的に集合した人々のみを指すものとは捉えなかった。『群衆心理』の一節で彼は、「群衆の移ろいやすい意見は、かつてよりその数を増している」(“the changeable opinions of crowds are greater in number than they ever were”)と述べ、その理由の最後の一つとして、「近年における新聞出版の発達」(“the recent development of the newspaper press”)を挙げる(95-96)。新聞によって「最も相反する意見」(“the most contrary opinions,” 96)が間断なく提示されるため、群衆の関心は一つ的话题に滞留することなく、絶えず移ろい続けるというのである。

実際、後期ヴィクトリア朝とは、中産階級の躍進や労働者階級に対する学校教育の拡大、また印刷技術の向上や電信技術の普及、諸税の廃止と比例して、新聞の発行部数が飛躍的に伸びた時期でもあった(Lea 26-28, 46-49; Curtis 55-57)。1868年において43紙だった日刊紙・夕刊紙の数は、1886年において139紙へと拡大し、読みやすかつ扇情的・ゴシップ的なスタイルが主流となっていく一連の動きは、半ば揶揄を込めて「ニュー・ジャーナリズム」と呼ばれるようになる(Lea 131)。その呼称のきっかけとなったのは、

マシュー・アーノルドによる批判文であった。

We have had opportunities of observing a new journalism which a clever and energetic man has lately invented. It has much to recommend it; it is full of ability, novelty, variety, sensation, sympathy, generous instincts; its one great fault is that it is *feather-brained*. (638)⁵⁾.

ル・ボンが「群衆」の定義を拡大した背景には、こうした新しい「低能な」ジャーナリズムの発展と、無批判にそれに飛びつきながら、自らの意見を気まぐれに変転させていく読者層の存在があったと言えるだろう。

『日陰者ジュード』に登場するクライストミンスターの群衆は、むしろこうした新聞によって結びあわされた広義での「群衆」に近い。もちろん祝祭そのものに新聞が直接的に関わっているわけではない。だが、テキストを精細に読み込んでみると、実は新聞がジュードたちの人生に少なからぬ結びつきを持っていることが見えてくる。例えば、メルチェスター (Melchester) の教員養成学校において、外泊を咎められたスーが脱走を図ったとき、女教師が心配したのは、スーが裏手の川で溺死したかもしれない——水音が聞こえたというのがポーターの証言であった——ということではなく、「あらゆる新聞においてその事件の詳細を記載した半コラム分の記事が掲載されるという可能性」(“the possible half-column detailing that event in all the newspapers,” 137) であり、その記事が学校の評判を貶めるという可能性であった。また、そもそもスーが、それまでの人生において新聞記者と深い関わりを持っていたことも忘れてはならない。クライストミンスターにおいて彼女と親密な仲になりながらも、その求愛を拒絶され続け、ついに命を落とすに至ったかわいそうな大学生のことである。卒業後、ロンドンでスーと同居するうちに彼が選んだ道は、「ロンドンの大きな日刊紙の論説記者」(“a leader-writer for one of the great London dailies,” 142) になることであった。

5) ここでアーノルドの批判の矛先が向けられている「才気のある精力的な人物」とは、児童売春などのセンセーショナルな題材で一躍注目を集めた「パルメル・ガゼット」(Pall Mall Gazette) の編集者、W・T・ステッド (W. T. Stead) のことである。Lee 118 参照。

そしてこの小説において、新聞は、街路を満たす身体的現前としての群衆とも潜在的な関わりを抱えている。クライストミンスターでの祝祭の直後、ジュードとアラベラ (Arabella) の間に生まれた子供、「小さき時の翁」(Little Father Time) が、彼とスーの実子二人を巻き添えに自死を遂げると、「新聞記事」(“[a]ccounts in the newspapers”) を読んで「好奇心を抱いた暇人たち」(“curious idlers”) が、埋葬も終わらないうちに現場の宿に群がり始めるのだ (329)。事件の報が届くのは近隣の住民にとどまらない。別の街で暮らすアラベラやフィロットソン (Phillotson) もまた、新聞を通じて、彼らの元配偶者たちに何が起こったかを詳細に知ることになる (336, 344)。物語の舞台となっている社会において、新聞という新しいテクノロジーは、人々の情報共有をかつてないほどのスピードと範囲をもって推進していく。そのような時代に現れた祝祭日の群衆は、ル・ボンの提示した新時代の「群衆」像と多分に重なり合っただけに見えるのである。

そして、ジュードの報われない人生が終わりを迎えるとき、ハーディーはまたもこの群衆を舞台に登場させる。翌夏、再び巡ってきた創立記念祭の日、子供たちを亡くし、スーにも去られたジュードは、失意の中かつての妻アラベラとともに暮らす部屋で、誰にも看取られることなくひっそりと息を引き取っていく。ジュードの様子を見に帰ってきたアラベラは、異変に気づきながらも、友人の職人たちとボートレース観戦を楽しむために、再び群衆で賑わう街へと繰り出していく。

They went with the *crowd* down Cardinal Street, where they presently reached the bridge, and the gay barges burst upon their view. Thence they passed by a narrow slit down to the riverside path—now dusty, hot, and *thronged*. Almost as soon as they had arrived the grand procession of boats began; the oars smacking with a loud kiss on the face of the stream, as they were lowered from the perpendicular.

“Oh, I say—how jolly! I’m glad I’ve come,” said Arabella. “And—it can’t hurt my husband—my being away.” (394; emphasis added)

人々で満ちあふれる街を歩いていくアラベラの目に、蕭然とその屍を横たえるジュードの姿はもはや映らない。華やかに水上を進んでいくボートの一団を見ながら歓喜する彼女の関心は、完全に群衆のそれと同調しながら、ただ眼前で展開される事物のみに向けられていくのである。本来、個と個との間を取り結ぶはずの共感は消失し、無数の人が満たす街のただ中において、ジュードの報われない生は、無関心に包まれながら孤独に閉じられていく。

以前、ジュードとアラベラの、そしてスーとフィロットソンの離婚裁判が決着した際、ジュードはスーに向かって、著名な貴族などのように世間の関心を集めない生活のことを、「僕たちのように貧しく無名であるということにはこうした利点がある」 (“[t]here is this advantage in being poor obscure people like us,” 248) と喜んだ。実際、彼らの裁判は、「新聞で報じるにはあまりに取るに足りないもの」 (“too insignificant to be reported in the papers,” 247) だったのである。しかし、正式な婚姻関係を結ばないまま営まれた彼らのその後の人生は、皮肉にもこの世間の好奇や関心によって翻弄され、それを悲観した「小さき時の翁」の手によって、ついに破綻を迎えることになる。事実、事件現場に集まってきた野次馬たちの好奇心は、悲劇そのものだけでなく、「夫婦の本当の関係にまつわる疑念」 (“[d]oubt of the real relations of the couple,” 329) にも向けられていくのだ。

他方で、そうした群衆の関心には、『バーナビー・ラッジ』や『北と南』に見られたような一貫した悪意もなければ、善意への回帰もない。定まったプロットラインに決して乗ることなく、ハーディーの群衆は、その熱中しやすさと移ろいやすさをもってジュードという〈個〉の人生を翻弄しながら、隠れた撰^{エージェンシー}理として物語を支配し、その終結を導くのである。

かくして、ディケンズ、ギャスケルからハーディーへと至り、小説は新しい形態の群衆を獲得する。それはまさにモダンの、言い換えれば「群衆の時代」の感覚をテキストに満たしながら、新しい〈個〉の物語を推進していくのである。

(筆者は関西学院大学商学部教授)

引用文献

- Arnold, Matthew. "Up to Easter." *Nineteenth Century* 123 (1887): 629-43.
- Dickens, Charles. *Oliver Twist*. 1846. New York: Norton, 1993. Print.
- . *Barnaby Rudge*. Oxford: Oxford University Press, 2008. Print.
- Gaskell, Elizabeth. *North and South*. Oxford: Oxford University Press, 2008. Print.
- Hardy, Thomas. *Jude the Obscure*. Oxford: Oxford University Press, 2008. Print.
- Le Bon, Gustave. *The Crowd: A Study of the Popular Mind*. 1896. New York: Mineola, 2002. Print.
- Lee, Alan J. *The Origins of the Popular Press in England, 1855-1914*. London: Croom Helm, 1976. Print.
- Morton, A. L., and George Tate. *The British Labour Movement, 1770-1920*. London: Lawrence and Wishart, 1956. Print.
- Pepys, Samuel. *The Diary of Samuel Pepys*. Vol. 9. Berkeley: University of California Press, 1995. Print.
- Shuttleworth, Sally. Introduction. *North and South*. By Gaskell. ix-xxxiv. Print.